

## 第4章 村山市の歴史的環境

### 1) 村山市の歴史概要

村山市域には160を超す遺跡があります。近隣の大石田町、東根市などに比べ、これまでに知られている遺跡がより豊富に認められています。

特に縄文時代の遺跡が数多く見られ、市域の西側では最上川左岸の段丘や、富並川左岸の河岸段丘、大高根南麓の山裾部に集中して分布しています。これに対し、奈良・平安から中世の遺跡はその多くが最上川右岸の平地に所在する傾向が見られます。

出羽国内には古代の交通の拠点であった、最上・村山・野後・<sup>のじり</sup>避翼・<sup>さきはね</sup>佐芸・<sup>さき</sup>白谷・<sup>しらや</sup>飽海・<sup>あくみ</sup>遊佐・<sup>ゆさ</sup>蚶方・<sup>きさかた</sup>由理・秋田の11駅が存在したと考えられています。県内には、最上から遊佐の8駅が存在したとされ、このうち野後・避翼・佐芸・白谷は船を備えた水駅であったとされています。仁和2年(886)11月、最上郡は最上郡と村山郡の二郡に分けられますが、その境界は現東根市の南部辺りと推定されています。当時は南部が最上郡で、北部が村山郡とされ、現村山市域は村山郡の村山郷から大倉郷付近と推定されています。西郷地域北部に位置する清水遺跡は、東北中央自動車道の建設に伴い大規模な発掘調査が行われた結果、9世紀代の東山道の村山駅にあたるのではないかと考えられています。古代の末には国衙域であった村山市域の南部域には小田島荘(東根市・村山市)が成立したとされています。

鎌倉幕府滅亡の後、南北朝の争いの中で小田島荘の地頭職は両朝の間で動揺しますが、実際の在地では小田島氏が強靱な在地勢力を保持していたようです。南北朝統一後にこの地方を治めたのは、奥州探題であった<sup>しば</sup>斯波氏一族です。この一族は一族庶子の分封、有力氏族との婚姻関係による連繫などによって、出羽探題として領地の拡大を図り、のちに最上氏としてこの地域の統一を果たします。最上氏による出羽地方の統一によって、村山市域もすべてその領内に属することとなります。

### 2) 宗教と信仰

山形県は出羽山地を境として、日本海側と内陸地方に分かれています。いずれの地方も周囲を連なる山々によって遮られており、これらの自然に対する畏怖と畏敬がこの地方の信仰を形作っています。村山地方では東は奥羽山脈に連なる山々が、西は出羽山地に連なる山々が信仰の対象となりました。とくに西側の出羽山地は出羽三山の中でも庄内地方・村山地方の双方から望める月山を中心として信仰対象の山々が連なっています。村山地方においては、小田島荘が成立する前後の時期には東の御所山(船形山)、西の葉山が自然信仰における聖地とされ、そこに天台仏教が浸透し、山麓に天台寺院が建立されました。村山市域においては西にある葉山、東の甕岳が古くから信仰の対象となっており、山岳信仰や修験道と密接な関係を持っています。また、かつて葉山は出羽三山の1つに数えられていました。

南北朝から室町時代にかけては、小田島荘を挟んだ東の<sup>おおもり</sup>大森山(現東根市)、西の河島山(現村山市)と二つの聖地が現れます。いずれも経塚・中世寺院跡・板碑・五輪塔・土壇など多数が存在し、鎌倉・戦国時代にかけて、山岳信仰、霊場として成立したと思われます。ことに河島山は周辺で見つかった70基を超す板碑や五輪塔、<sup>ほうきょういんとう</sup>宝篋印塔等の石造物のほか、経筒や一字一石経が発見され、板碑はその特徴から室町時代末頃から桃山時代初め頃に創られたものと考えられています。最上川に沿った独立丘陵である河島山に造営された経塚は、舟運の難所に面することから最上川水運を守護している可能性も指摘されています。

# 1. 村山市の地域区分と歴史

最上氏の改易により、最上川西部では戸沢政盛が配され新庄藩領となり、幕末まで領主の変更はありませんでしたが、最上川東部はすべて山形藩領となり、楯岡城・山形城には鳥居忠政が配されました。その後もしばしば領主の変更があったことで幕府領と諸藩領が入組み錯綜した状態となり、元禄年間（1688～1704）まで9回の交代が行われています。その間、一時幕領となったこともありました。近世の村山市域は、東の羽州街道沿いの宿場町の発展、最上川の舟運、紅花・青苧<sup>あおそ</sup>などの生産の中心であった最上川西岸の寒河江から横山河岸<sup>よこやまかし</sup>（大石田河岸の対岸、現大石田町）に至る近道であった村山西部街道など、物資と人が行き交う地域でした。

近世時期の村の状況については、正保元年（1644）から作成がはじめられた『正保郷帳』に記録が残っています。実際の生産力とは異なり、大名が領地を与えられたときに記された表高に合わせたものですが、これによると市域には楯岡村・湯沢村・林崎村・櫛山村・本飯田村・土生田村<sup>とちうだ</sup>・大淀村・下長崎村<sup>かいしお</sup>・貝塩村<sup>しろうり</sup>・名取村・下山口村・大久保村・湯野沢村・岩野村・大槇村・白鳥村・富並村・山内村の18村が記録されています。第9図は『正保郷帳』に記録のあった、村山市域に所在する村の石高を図示したものです。円の大きさが石高を表し、円の色の割合が石高に占める田・畑の割合を示しています。この図には、当時の各村が主に何に依存して生活を営んでいたかが間接的に示されています。

最上川西側の集落の特徴：田方が石高のほとんどを占めている ▶ 新庄藩に属し農業を生業とする村々

最上川沿い集落の特徴：石高が少なく、畑方が多い。または石高が少なく、畑方がある一定の割合を占めている ▶ 舟運にかかわる村々

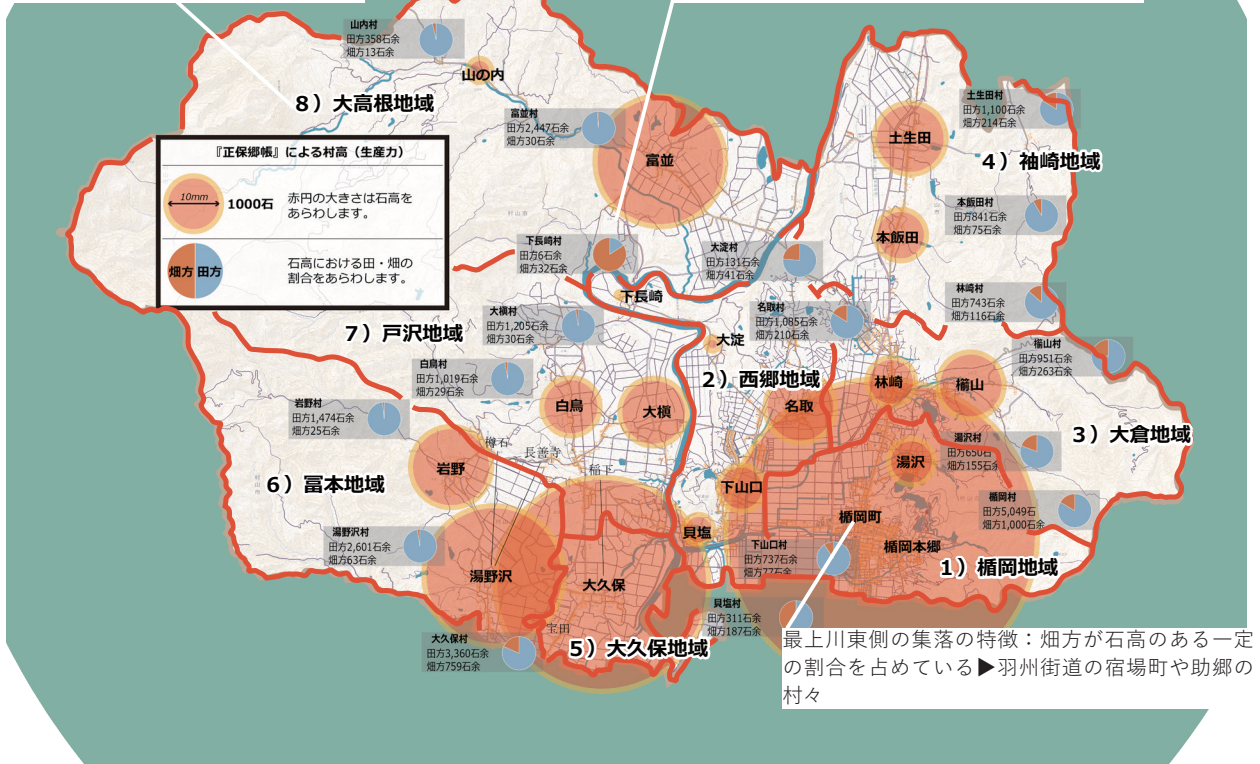


図9. 近世の村山市域の村高（生産力）と現在の地域区分

- 1 イラクサ科の苧麻（ちょま）という植物からとった繊維のことです。織物の原料として上質な麻製品に使用されました。
- 2 『正保郷帳』には湯野沢村と記載されていますが、富本地域の湯野沢村と区別するため、本編では以後湯沢村と表記します。